



本州では七夕といえば7月7日ですが、北海道では一般的に8月7日が七夕とされています。（実は、函館や根室など北海道の一部地域では7月7月に七夕が行われている）なぜ北海道だけ違うのか？

七夕は、天の川を挟んで向かい合う「織姫星」と「彦星」が旧暦の7月7日にだけ出会える、という中国の言い伝えからはじまった祭事です。夏の夜、東の空に見える、こと座の1等星のベガが「おりひめ」こと「織姫星」、わし座の1等星アルタイルが「ひこぼし」こと「牽牛星(けんぎゅうせい)」です。この二つの星は、旧暦の7月7日に特に美しく見えます。日本では奈良時代から七夕が行われるようになり、江戸時代には「五節句」のひとつとなり寺子屋の普及で読み書きや書道、そろばんなどの「手習い」を庶民が出来るようになると、七夕は一斉に庶民の間に広まり、さまざまな願いごとを書いた短冊を竹や笹に飾る「七夕飾り」が流行しました。

元々旧暦の7月7日に行われていた七夕ですが、北海道で8月に行うようになったのはこの「旧暦」の影響があるからです。明治5年（1872年）11月9日、明治政府はそれまで使用されていた旧暦の「太陰太陽暦」を廃止し、新暦として「グレゴリオ暦（太陽暦）」を翌年1月1日から採用することを決定しました。これにより、明治5年12月3日が明治6年1月1日となり、実質的に約1か月早くなったこととなります。“7月7日が七夕”という地域は、新暦に以降した際も、元々七夕を行っていた旧暦の「7月7日」という日付をそのまま七夕を実施するようになります。一方、北海道では旧暦の「7月7日」は新暦ではおおよそ「8月上旬」であることから、日付の「7日」だけを残し、ひと月遅れの「8月7日」に七夕を行うようになりました。なので、北海道の七夕の時期の方が「おりひめ」と「ひこぼし」がより美しく見える時期ということになります。